

幼児教育推進合同研修会

「発達障がいの子ども達と接する時」

令和5年9月5日に赤磐市中央図書館で幼児教育推進合同研修会が行われました。赤磐市巡回訪問特別支援教育専門員で大変お世話になっております成沢 真介先生に講話をしていただきました。

人生は自分ではどうにもならない必然によって始まり終わる。保育や教育も途上にある。不幸になりたいと思う生物はいない。みんな幸せになりたいと思っている。



子どもの困り感や行動の原因は何か。分からないからしたくないのか。そもそもできないのか。絶対に分かるという環境をつくってなければ、原因がどこか分からない。特に分かりにくさがある子への合理的配慮を考えることがどれだけ重要か、再確認させられました。



① 注目されたところが伸びる。

子どもの「見て見て。」は、見られることが報酬だからです。好ましくないところを減らすよりも伸ばしたいところに目を向ければ、「もっと見てほしい!」と、その行動が増えます。保育者・教師として、目の前の子どもに何を与えているか、行動を振り返させられる言葉でした。

『ありがとう』やほめることはとても有効。2次障がいを防ぐことが大切。

② 行動には理由と結果がある。

気になる子の行動は叱られることが多くなってしまいます。わざと困らせようとしている訳ではないのに、結果的にそうなってしまいます。理由を知り、言葉にならない気持ちをまずは受け止めること。「がんばったのに、うまくいなくてイライラするよね。」と、本人の思いを察知して言葉にする。『わかってもらえた』と思えると、次に進めます。大人の自己コントロール力が試されます。

言葉が最も力を発揮するのは、心から褒める時。

③ 自己コントロール力を育てる。

自尊心・自己肯定感とペアで育ちます。叱るのをやめただけで良くなることもあります。自分で我慢しようと思う環境を用意すること(わかる環境、興味のある内容、称賛・友達とのかかわり)最後は本人に決定させることが大切です。

④ 感じて育つ。

人が情報を処理するときは、視覚からの情報が80%と言われているため、視覚支援はとても有効です。自分で見て行動できているかどうか、まずは安心してできる環境づくりをすることが大切です。認知の発達で大事なものは、不思議なこと・わくわくすることです。

わかる・できる・面白そう! 自分から楽しんでやるのが身に付く。

⑤ まずは土台を安定させる。

疲れたら休む・相談する・ギリギリまで頑張らない。自立とは、適切に依存している状態。優れた人ほど人に頼るのが上手です。充実した依存経験(可愛がられた体験)が、優越感ではなく、自信になります。

『人よりできる』ではない。



参加された先生方は、自分のクラス、園や学校の子ども達の姿を思い浮かべながら、真剣にメモを取られていました。具体的な指導の方法やポイントなど、先生方からの質問に丁寧にアドバイスをしてくださり、明日から子ども達と向き合うことが楽しみにしているような感想が多くありました。『子どもも大人もありのままがいいんだよ』と、温かく励ましていただき、前向きな気持ちになれました。